

今日的な農業・農村の可能性を考える

生物資源科学部 アグリビジネス学科

1年 三浦 瑚夏

1年 波田野 梨絵

1年 沼沢 太雅

1年 原田 怜司

1年 飛田 智哉

指導教員 生物資源科学部 アグリビジネス学科

教授 荒樋 豊

1. 研究目的

現在、日本の農村は多くの問題を抱えている。代表的な問題として、高齢化や過疎化があげられる。この問題の解決策の一つとして、地域住民による農村活性化という取組があげられる。農村の衰退を救うためには、この取組が重要になってくる。

農業農村の活性化を実現するには、農村の基幹である農業の実態を把握し、農村に暮らす住民のふるさと振興意欲を知る必要がある。本研究では、地域の住民・農業者が求めるものは何なのか、それを満たすにはどのような取組が必要なのか、農作業の大変さと面白さは何なのかなどを考えながら、地域それぞれの実情に即した農業農村の活性化計画を検討する。

2. 方法

秋田県には多くの農村があることから、具体的な農村地域を直接、自分の目でみ、住民の声を耳で聞き、地域に潜む課題の発掘をおこなう。具体的には、それらの農村に休日などを利用して訪問し、住民との交流を図り、住民の方々がチャレンジされている取組を学ぶ。

主な調査対象として、三種町上岩川地域での伝統行事「ねぶ流し」の実践、秋田市四ツ小屋地域で始まったファーマーズマーケットの実践活動、そして大仙市中仙地域で進められているメガ団地による地域振興とその周辺での訪問者拡大のための観光マップの制作に関与する。また、農村活性化計画のための知識を深める。

3. 調査活動

まず、文献学習として、キャンパス内で、2週間に1回程度の頻度で、勉強会を開催しながら、「農村活性化計画」などに関する文献を読み、知識を深めた。

次に、まず研究の対象である農村というものを知るために、現地調査を実施した。3

つの地域への訪問のための行動計画を立て、休日を利用して、各地域に訪問し調査をおこなった。訪問先への主な訪問調査は、次の通りである。

○現地調査の日程と内容

6月3日	上岩川地域：特徴的な農村施設等の視察	地域の方々との交流
7月22日	四ツ小屋地域：ファーマーズマーケット視察	直売活動の支援
8月6日	上岩川地域：「ねぶ流し」行事への参加	お母さん方との交流
8月10-13日	中仙地域：メガ団地での農業体験と宿泊体験、観光マップ制作	
9月9日	四ツ小屋地域：直売となべっこイベントへの参加・聞き取り調査	

4. 調査・研修報告

1) 農村活性化実践の特徴

①三種町上岩川地域での「ねぶ流し」行事

上岩川地域には、江戸時代末期から伝わる七夕行事である「ねぶ流し」が永く維持されている。高さ3メートル程のわら人形を制作し、川に浮かべて、火をつけ、地域の無病息災を祈願する行事である。



写真1 ねぶ流しの風景



写真2 現地での学性の様子

現在、高齢化率50%を超えるこの地域では、若者の減少により行事の担い手の脆弱化が強まるが、それでも懸命に維持・継承されている。外部協力者として、我々も参加した。参加によって、小さな山村の小さな魅力を発見することができたように思う。また、上岩川地域を散策し、岩川神社などのむら的な施設の見学もおこなった。地域のおかあさん達が経営する食堂で、手作りの地域料理を食することもできた。

②秋田市四ツ小屋地域でのファーマーズマーケットの実践

四ツ小屋地域は秋田市の南部に位置している。平成30年度から農山漁村振興交付金を獲得し、地域の元気づくりを住民の手で進めている。地域住民は元気づくり協議会という組織を立ち上げた。その一環として、「四ツ小屋ファーマーズマーケット(せせらぎ市)」の取組を開始した。地域中央部の小学校跡地を利用して、月2回のせせ

らぎ市が開催されている。日曜日の午前11時にオープンするが、周辺の都市的地域へのチラシ配布の効果もあって、徐々にお客の数が増えつつある。売りは、地元の新



写真3 「せせらぎ市」(オープン前)でお



写真4 せせらぎ市の試食会

こなわれていた「なべっこ行事」(地域の子供と親世代・祖父母世代との交流の機会)の再興を目指して、9月と10月には四ツ小屋なべっこ交流も実施された。

これらの取組は、地域つきあいの希薄化の深まりを脱すべく、新たな交流機会の創出を目指した「せせらぎ市」や「なべっこ交流」が一定の役割を果たすようになっている、と我々は評価している。今後、継続的な維持のため、元気づくり協議会の役割は重要である。

③大仙市中仙地域の取組 (メガ団地での農業体験と

農家民宿での民泊体験、そして観光マップ制作)

中仙地域では、トマトのメガ団地(104棟)が整備され、稼働を始めている。水田稲作からの脱却という秋田県農業の将来に向けて、動き始めた取組である。市場向け青果販売だけでなく、業務向けトマトの生産も手がけるものである。そこで、仙北地域振興局と連携する形で、我々学生はトマト栽培の農業体験をさせていただいた。

作業内容は、トマトの芽かき、下葉とり、果実の収穫と、箱詰め作業である。芽かきと下葉とりの作業は収穫の前処理にあたり、花粉やヤニが身体に付く地味なものであるが、この作業がなければ、果実が上手く実らない。各々の作業の重要性を実感することができた。作業を担う労働力が不足していることがあり、栽培環境としては機械化が進展しているにもかかわらず、予定数量を確保することが難しいという点を感じ取ることができ



写真5 農業体験のシンポジウム

た。

最後に、今回の農業研修に関して、メガ団地の経営者と仙北地域振興局と大仙市役所が集まり、学生からの意見発表の形でシンポジウムが開催された。

もう一つ、中仙地域での我々のテーマは、訪問者受入の観光マップを学生目線で制作してみるというものである。仙北地域振興局と大仙市役所の協力を得て、地域内の特徴的な施設や場所を訪問し、観光資源化の可能性を検討した。

代表的な訪問先は、次の通りである。①山懐に佇む小沼神社（写真6）〔御神体が



写真6 小沼神社の全景



写真7 湧水を利用した水車発電



写真8 水上の整備された水板倉



写真9 八乙女公園から望む仙北平野



写真10 水神社の正面

大切に保存されている。また廃仏毀釈の折、この神社を守るため集落全戸が神道に改宗したことをうかがった〕、②この地域は湧き水が豊かであることから、湧水を活用した水車発電施設（写真7）〔県のモデル事業として試行中〕、③水田の上に整備された水板倉：穀物貯蔵の倉（写真8）〔このような施設が現存しているのはたいへ

ん珍しい]、④桜の名称であり、高台にあることから地域の眺望に優れた八乙女公園(写真9)、⑤秋田県で唯一の国宝をもつ水神社(写真10)などを見学した。

これらの地域資源を訪問者に知らせるための地域の観光マップに活かす術の検討



図1 中仙地域の観光マップ

をおこなった。そして、学生だけで、図1のような観光マップを作成した。作成時間が必ずしも十分に確保できなかったことから、簡略的な作品となった感は否めないが、地元住民の方々からは高く評価いただいた。

5. 考察

今回の研究を通じて、農村活性化の取組には多様な形態があり、地域住民のニーズに即した展開がおこなわれていることを知ることができた。私たち学生は「農村活性化といえば、何か教科書のような取組が所与にあって、それを遂行すれば良い」と考えていたことに気づいた。地域に見合うことが大切であり、「観光業的なイベントは、自分の地域にはそぐわない」とか、「私の地域は農家を盛り上げることから始まる」とか、「高齢化したけど、我々には誇れる伝統行事がある」など、様々な意見を聞くことができた。

私たち学生が農村活性化に関与し貢献するために大切なことは、「ふるさとを守りたい」という住民の方々の気持ちにできるだけ近づいて、対策を考えるということではないだろうか。学生の立場から何ができるのかを考えてみたい。